

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K02202

研究課題名(和文)鈴木大拙の『大乘仏教概論』と、ウェーバーの比較宗教社会学へのその影響に関する考察

研究課題名(英文) A study on Daisetz Teitaro Suzuki's work "Outlines of Mahayana Buddhism" and its influence on Max Weber's comparative sociology of religion

研究代表者

横田 理博(YOKOTA, Michihiro)

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：10251703

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：鈴木大拙の『大乘仏教概論』の理解を深め、それがどのような思想の影響のもとに成立したのかを、仏教古典(『大乘起信論』と華嚴哲学)、西洋思想(とりわけアルトウーア・ショーペンハウアー)、鈴木の人々(釈宗演とポール・ケイラス)に即して解明した。また、マックス・ウェーバーの鈴木への言及に着目し、ウェーバーが大乘仏教を含めた「世俗内的神秘主義」という類型について検討するとともに、ウェーバーと鈴木との接点として、セントルイスの「芸術・科学会議」への参加、ウィリアム・ジェームズへの両者の関心、両者へのエーリッヒ・フロムの関心などについて考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『大乘仏教概論』に帰結する鈴木大拙のアメリカ滞在期間の思想形成という、従来論じられてこなかった問題を明らかにした。その際、仏教の古典の受容、西洋思想の受容、周囲の人々からの影響の受容といった多角的な論点に着目した。マックス・ウェーバーと鈴木大拙との関連という本研究の問題設定もまた従来の研究の盲点であった。

鈴木『大乘仏教概論』は、大乘仏教一般というより日本仏教のあり方を示していると言われている。この点を踏まえるなら、『大乘仏教概論』およびそれについてのウェーバーの『ヒンドゥー教と仏教』での言及は、日本人の伝統的思想・エートスについて探る上で寄与しうるものだと言える。

研究成果の概要(英文)：This research deepens the understanding of Daisetz Teitaro Suzuki's work "Outlines of Mahayana Buddhism" and clarifies the sources for the formation of its theory as classical texts of Buddhism ("the Awakening of Faith in the Mahayana" and Avatamsaka philosophy), western thoughts (especially Arthur Schopenhauer) and the people around Suzuki (Soyen Shaku and Paul Carus). Moreover, it pays attention to Max Weber's reference to this work, examines Weber's type of "innerworldly mysticism", which includes Mahayana Buddhism, and investigates connections between Weber and Suzuki, such as their participations in "the Congress of Arts and Science" held at St. Louis in 1904, their interest in William James, and Erich Fromm's interest in both of them.

研究分野：倫理学

キーワード：鈴木大拙(D. T. Suzuki) 『大乘仏教概論』 アメリカ(America) 『大乘起信論』 ショーペンハウアー(Schopenhauer) 釈宗演(Soyen Shaku) ポール・ケイラス(Paul Carus) マックス・ウェーバー(Max Weber)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

学生時代以来、マックス・ウェーバーの比較宗教社会学の研究を続けてきて、そこから東洋思想、あるいは日本人のエートスについての手がかりを得たいと考えてきた。一方、西田幾多郎の初期の思想についての研究にも従事し、思想内容において西田と共鳴し合っている鈴木大拙の思想への関心を抱いていた。これら二つの関心を合流させるテーマとして、鈴木大拙の英文著作『大乘仏教概論(*Outlines of Mahāyāna Buddhism*)』の成立プロセスと、この著作へのウェーバー対応の仕方に焦点をあてることを着想した。

2. 研究の目的

鈴木大拙の『大乘仏教概論』の思想内容を解明し、その思想の形成に影響を及ぼした諸要因を探る。また、鈴木へのウェーバーの言及を含め、ウェーバーと鈴木との関連について探索する。

3. 研究の方法

鈴木大拙の『大乘仏教概論』を精読し、その思想内容において特徴的な点を理解する。そして、この著作において、『大乘起信論』などの仏教テキストから鈴木が何を採用したのか、ショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』の思想を鈴木がいかに援用したのか、釈宗演やポール・ケイラスの著作の内容とどう関わっているのか、などについて探る。

また、鈴木『大乘仏教概論』にウェーバーは『ヒンドゥー教と仏教』でどう対応しているのか、鈴木が基軸としていた「愛と知」という問題がウェーバーにおいてどのように展開されているのかを明らかにする。

鈴木大拙と大拙夫人ピアトリスとの旧蔵書や書簡が保管されている松ヶ岡文庫(鎌倉市)での資料調査、鈴木大拙や釈宗演からポール・ケイラスに宛てられた書簡などが保管されている南イリノイ大学カーボンデル校のモリス図書館での資料調査を通じて、鈴木とその関係者たちとの交流関係などを探る。

4. 研究成果

マックス・ウェーバー(1864~1920年)と鈴木大拙(1870~1966年)の二人の間には、ウェーバーが『ヒンドゥー教と仏教』という著作の中で鈴木『大乘仏教概論』に言及しているという接点がある。この接点を含め、鈴木とウェーバーとが関連するいくつかの論点について考察した。

(1) セントルイスの「芸術・科学会議」への参加

鈴木大拙は1897年より十一年の間、シカゴ郊外のラ・サールに滞在した。マックス・ウェーバーは1904年から翌年にかけて生涯で一度だけアメリカ合衆国を訪れた。偶然にもこの二人は同時期にアメリカに滞在していた。興味深いことに、この二人は1904年に同じイベントに参加している。セントルイスの「芸術・科学会議(the Congress of Arts and Science)」である。

1904年の4月30日から12月1日にかけて、アメリカ合衆国のセントルイスで万国博覧会が開催される。この万国博覧会と相関関係にあるものとして構想されたのが「芸術・科学会議」であった。この会議の方向性をリードしていたのは心理学者フーゴー・ミュンスターベルク(Hugo Münsterberg, 1863~1916年)である。彼はフライブルク大学でウェーバーと同僚であったが、ウィリアム・ジェイムズに招かれてハーバード大学で教職に就いていた。

「芸術・科学会議」第22部会(社会科学)の中のセッションB「農村共同体」においてマックス・ウェーバーは「農村共同体の、社会科学の他分野との関係」というタイトルで報告する。前半では、ヨーロッパ大陸と英米との農業事情の違いが説明され、後半では、ドイツの農村地域の社会構造が二つの地域(西部南部と東部)の間で大きな違いがあることをめぐって議論が展開される。この講演をしているマックス・ウェーバーはまだ、のちの比較宗教社会学者としてのウェーバーではない。農業労働状況の分析者としてウェーバーである。『エルベ川以東のドイツにおける農業労働者の状況』(1892年)の分析の実績を踏まえてウェーバーは農業労働者の実態と動向についてのアメリカ講演をおこなった。

一方、第8部会(宗教の歴史)の中のセッションA「バラモン教と仏教」において、鈴木大拙による「仏教はニヒリスティックか?」と題する「十分間講演」がおこなわれた。仏教は本来、消滅・死滅をよしとするわけではなく、道徳・倫理を説くものだ(つまり、仏教はニヒリスティックではない)とする点、宗教は新しい環境に柔軟に適応して変質していかねばならないという点が言及された。

(2) 鈴木『大乘仏教概論』へのウェーバーの言及

『ヒンドゥー教と仏教』の第三部第三章「大乘仏教」において大乘仏教の教理を説明するにあたって、ウェーバーは主として鈴木大拙の『大乘仏教概論』を参照している。

『大乘仏教概論』は若い頃の鈴木大拙がアメリカ滞在中に英語で出版した著作である。そこには、すべてのものが究極的実在としての「法身」の顕現だとする考え方、「法身」において「愛」と「知」とが一体だという主張、仏教は生の終焉を美化するニヒリスティックな思想ではなくむしろ生の肯定の思想だという「涅槃」観、感応力・影響力を含めて因果性全般を「業」と捉える見方など、ユニークな論点が示されている。その特徴的な思想は、『大乘起信論』や華嚴哲学の仏教テキスト、ショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』などの西洋思想、シカゴでの万国宗教会議に参加し鈴木を日本から送り出した禅の師匠である釈宗演、「科学的宗教」を標榜しアメリカで鈴木を受け入れたポール・ケイラスなど周辺の人々との交友、これら様々なテキスト・人々の影響のもとに形成された。

ウェーバーは大乘仏教徒の生き方に「世俗内的神秘主義(die innerweltliche Mystik)」を見出す。ウェーバーがこの論述に際して依拠しているのは、鈴木『大乘仏教概論』第13章の「涅槃」論の中の見解だと考えられる。鈴木はもちろん「世俗内的神秘主義」という言葉を使わないが、『成唯識論』に依拠して「無住处涅槃」の境地を説明するにあたって、新訳聖書の「泣く人は泣かない人のように、……」という言葉(「コリントの信徒への手紙 一」第7章第30,31節)を使い、そのような境地との類似性を示している。この指摘を読んだウェーバーが、大乘仏教に、ルター派の信仰にも見ていた「世俗内的神秘主義」を見出したのではないかと推測される。仏教思想の中にキリスト教との共通点と対照点を探った鈴木と比較思想の姿勢がウェーバーによって活用されたということになる。

鈴木という大乘仏教は、歴史上の大乘仏教のあり方をそのまま伝えているというよりも、現代という科学技術の時代においてもながしかアピールできるように理想化された形で再構成された大乘仏教だと考えたほうがよい。何が本質かを描き出した鈴木の大乗仏教論を読んだウェーバーが、もしも大乘仏教とは全体としてそういうものだとして経験科学的・歴史学的に理解したのだとしたら、そこにはかなりの齟齬があったと言えるだろう。

大乘仏教を論じる上での鈴木とウェーバーの前提・方向性は全く異なる。鈴木は自らもその教えを継承する当事者である大乘仏教の本質を探った。彼は原始仏教から大乘仏教への変遷を、釈迦自身の思想が萌芽的に含んでいた核心的なものを展開していったのだとポジティブにうけい

れる。また、とくに「業」の理解などは、歴史上の大乗仏教を離れて今日にも通用するように理想化された形に変容されている。これに対して、経験科学者であるウェーバーは、その宗教思想を信じた人々の間にどんなエートスがうみだされたのか、そしてそのエートスは近代資本主義の展開を促す働きをしたのか阻害する働きをしたのか、こういう歴史的・経験科学的因果関係を探ろうとした。ウェーバーの大乗仏教論が、その担い手の階層やその後の魔術的傾向に関心を示しているのはそのためである。

(3) ウィリアム・ジェイムズという結節点

鈴木とウェーバーとはきわめて異質なタイプの思想家であるが、ウィリアム・ジェイムズ(1842~1910年)という人物に二人がそれぞれに深い関心を寄せていたという事実は、この両者の異質性を緩和して結節点を提供してくれるかもしれないルートである。

ジェイムズの『宗教的経験の諸相』は、1901年から翌年にかけてのエディンバラ大学での講義の内容であり、人々の宗教的体験談を収集した上で、自己と超越者との一体感を中心とした宗教的心理が分析されている。ジェイムズは、生理学から心理学へ、心理学から哲学へと立場を変えていくのだが、『宗教的経験の諸相』は基本的には宗教心理学の立場である。この『宗教的経験の諸相』の第18講「哲学」の中でジェイムズは宗教的感情とその哲学的定式化との関わりを論じている。感情こそが宗教の「源泉」であり、哲学や神学は「第二次的な産物」にすぎない、感情という源泉のないところに哲学や神学はありえない、とジェイムズは言う。

鈴木もまた、宗教の中心には「神秘的感情(mysterious sentiment)」があり、この感情が言葉で表現された結果として教義が生まれる、その原点となる「神秘的感情」において仏教もキリスト教も同一だと考えている。

ウェーバー夫妻は1904年8月から翌年の11月にかけてアメリカを旅行した。先述のセントルイスの「芸術・科学会議」での講演のためである。この旅行の折にウェーバーはジェイムズに会ったと推測されている。

宗教において、感情・体験を第一次的なものと見て、思想・観念は第二次的なものにすぎないと見る見方——これはジェイムズの宗教心理学に代表され、そしてこの時期の鈴木も同じ立場である——をウェーバーは一応評価しながらも、神観念の違いがその後大きな影響をもったことを主張している。ジェイムズは、宗教的経験の感情状態に着目し、神との一体化を感じる神秘主義的な宗教的経験において、キリスト教神秘主義・ヒンドゥー教のヨーガ・仏教の禅・イスラムのスーフィーなどが共通するということを語ろうとする。これに対してウェーバーは、感情・体験において共通かもしれないが、それに加えられた説明としての思想体系の違いに応じて信者の行為パターンが変わってくるということを語ろうとする。宗教による歴史的影響を考える上では、感情よりもそれぞれの宗教の中での「観念」(意味づけ)、「世界像」が重要だとウェーバーは考えた。

鈴木とウェーバーとはともにジェイムズに強い関心をもっていたのだが、その関心の所在が両者ではだいぶ異なっている。たとえば、宗教的感情の重視という点でジェイムズと鈴木とは共通するが、ウェーバーはこの立場からは距離をとる。一方で、宗教研究において事実認識と価値評価とを区別する経験科学の立場においてジェイムズとウェーバーとは共通するが、鈴木はそこに関心を示さない。しかし、宗教をその当事者の思いの実態に入り込んで探り、しかもその信仰心がどのような行動に帰結するのかという射程まで考慮したという点に、ジェイムズ・鈴木・ウェーバーという三人の共有点を見出せる。

(4) 「愛と知」はどう論じられるのか

鈴木大拙は“愛と知との相即性”を一貫して主張した。では、ウェーバーにおいては「愛と知」という問題はどのように論じられているのだろうか。

『中間考察』には、知的能力は生来不公平であるから同胞愛の平等主義とは抵触するという指摘がある。知性の反同胞愛倫理性について「貴族制(Aristokratie)」という言葉も使われている。学問の有無あるいは深淺が序列化され差別の根拠になると、そこには個々人の倫理性とは別次元の「貴族制」が成立することになるからである。

ウェーバーは、宗教展開のダイナミズムを構成するものとして、「同胞愛倫理(Brüderlichkeitsethik)」の展開とともに、「知性主義(Intellektualismus)」(世界を知性によって理解し意味づけていく働き)の展開、とりわけ「神義論(Theodizee)」――何らかの宗教的世界像が与えられている状況下で、現世を支配する超越的なものの属性と、現実における苦難の配分との矛盾が意識される時、その矛盾を解消しようとする合理的な論理(解釈)を、その世界像の核心は維持したまま、思惟によって導出しようとする試み――の展開を重視していた。ここにはウェーバーの「知」へのこだわりが見て取れる。「愛」と「知」とはそれぞれウェーバーにとって宗教展開のダイナミズムの要だった。

そして、神義論という「知」が首尾一貫して展開された形態が三つあるとウェーバーは言うのだが、その三形態の一つカルヴィニズムにおいては「愛」の喪失・放棄が指摘されている。カルヴィニズムの「世俗内的禁欲」は、救われる人間と救われざる人間とを二分し、前者が後者を軽蔑し差別するエートスをうみだした。ウェーバーはここに「永遠の昔から神によって予定された世俗内部における聖徒たちの宗教的貴族制(Aristokratie)」を見出し、これを「反同胞愛(Unbrüderlichkeit)の立場」と呼んだ。「知」が完結したとき(あるいは、知がその限界に達したとき)「愛」が失われた。これは愛と知との相剋・緊張関係を示している。宗教の中で愛と知とは必ずしも両立しながら展開するわけではない。「知性主義」ないし「神義論」は、その展開の中で「同胞愛」を制限する、つまり或る種の差別状況を正当化・固定化させる場合もある。「知性主義」には開かれた方向のものと、閉じた方向のものがある。

ウェーバーがイエスの立場を「反知性主義的(antiintellektualistisch)」と位置づけていることも「愛と知」の問題を考える上では示唆的である。今日「反知性主義」と言えば、政治上の思潮として、政策や理念を理性的に考量するよりも、情緒的なスローガンに煽られて何らかの立場(しばしば或る人々の人権を尊重しない立場)を熱狂して支持する態度を指す。ウェーバーもまた、第一次世界大戦後の混乱期にそのような情緒的態度が流行するのを批判していたのは確かである。しかし、管見の限りウェーバーがその著作の中で「反知性主義」と位置づけていたのはイエスであった。イエス当時のユダヤ教が、知識があって宗教上の戒律を守っている人々を高く評価し、そういう知識のない人々をさげすんでいた状況をイエスは批判した。つまり、今日の「反知性主義」は批判されるべき事態と考えられているのに対して、ウェーバーにおいて「反知性主義」は「知性主義」の問題を批判する姿勢として設定されていた。このような「反知性主義」は、愛の立場だとしてもよい。ここにも愛と知との相剋が見て取れる。

鈴木大拙とは異なってウェーバーは「経験科学者」であった。宗教社会学においては愛と知の多様な諸形態を経験科学的に考察し、時にはその問題点にも言及した。そして彼はたんなる経験科学者ではなく、そもそも学問(知の営み)とは何かを検討した方法論者でもあった。「愛と知」という問題は「価値評価と事実認識」、「生き方と学問」という問題にも広がっていく。「愛と知」を自らの仏教観の骨子としていた鈴木大拙の論じ方とは明らかに違うが、経験科学と方法論という形でウェーバー特有の「愛」論・「知」論が展開されていたと言ってよい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 横田理博	4. 巻 第82輯
2. 論文標題 「鈴木大拙の『大乘仏教概論』についての考察（中の三）」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 九州大学大学院人文科学研究院編『哲学年報』	6. 最初と最後の頁 1～35頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横田理博	4. 巻 第707号
2. 論文標題 「鈴木大拙とマックス・ヴェーバー」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『理想』	6. 最初と最後の頁 92～128頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横田理博	4. 巻 第81輯
2. 論文標題 「鈴木大拙の『大乘仏教概論』についての考察（中の二）」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 九州大学大学院人文科学研究院編『哲学年報』	6. 最初と最後の頁 1～39頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横田理博	4. 巻 第80輯
2. 論文標題 「鈴木大拙の『大乘仏教概論』についての考察（中の一）」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 九州大学大学院人文科学研究院編『哲学年報』	6. 最初と最後の頁 1～40頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横田理博	4. 巻 第55輯
2. 論文標題 「西田幾多郎の『善の研究』とショーペンハウアー」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 九州大学哲学会編『哲学論文集』	6. 最初と最後の頁 1～33頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横田理博	4. 巻 第46号
2. 論文標題 「ショーペンハウアーとの関連から見た西田幾多郎と鈴木大拙」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比較思想学会編『比較思想研究』	6. 最初と最後の頁 5～13頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横田理博	4. 巻 第79輯
2. 論文標題 「鈴木大拙の『大乘仏教概論』についての考察（上）」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 九州大学大学院人文科学研究院編『哲學年報』	6. 最初と最後の頁 1～45頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横田理博	4. 巻 第78輯
2. 論文標題 「鈴木大拙の『日本的靈性』についての考察（下）」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 九州大学大学院人文科学研究院編『哲學年報』	6. 最初と最後の頁 1～54頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横田理博	4. 巻 第77輯
2. 論文標題 「鈴木大拙の『日本的靈性』についての考察(上)」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 九州大学大学院人文科学研究院編『哲學年報』	6. 最初と最後の頁 25～76頁
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 横田理博	4. 巻 第29巻第1号(通巻45号)
2. 論文標題 「ウェーバーの法社会学の全体像 『形式的法』と『実質的正義』との対峙」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 電気通信大学(編)『電気通信大学紀要』	6. 最初と最後の頁 1～21頁
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 横田理博	4. 巻 第29巻第1号(通巻45号)
2. 論文標題 「学生の倫理意識 アンケートの集計結果」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 電気通信大学(編)『電気通信大学紀要』	6. 最初と最後の頁 1～12頁
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Michihiro YOKOTA	4. 巻 -
2. 論文標題 “Daisetz Teitaro Suzuki's Outlines of Mahayana Buddhism and its Relation with Arthur Schopenhauer: Reception of Schopenhauer in Meiji Japan”	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Das neue Jahrhundert Schopenhauers: Akten des Internationalen Forschungsprojektes anlaesslich des 200. Jubilaeums von Die Welt als Wille und Vorstellung (Wuerzburg: Koenigshausen und Neumann)	6. 最初と最後の頁 S.453-469
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 横田理博
2. 発表標題 「ショーペンハウアーとの関連から見た西田幾多郎と鈴木大拙」
3. 学会等名 比較思想学会第46回大会、シンポジウム「西田幾多郎と鈴木大拙 比較思想の視座から」提題、西田幾多郎哲学記念館
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横田理博
2. 発表標題 「鈴木大拙とマックス・ウェーバー」
3. 学会等名 ヴェーバー没後100周年シンポジウム準備会、東洋大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Michihiro YOKOTA
2. 発表標題 “A point of contact between Daisetz Suzuki and Max Weber: On Suzuki 's Outlines of Mahayana Buddhism and Weber 's reference to it”
3. 学会等名 24th World Congress of Philosophy, Peking, China (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 横田理博
2. 発表標題 「鈴木大拙の『大乘仏教概論』に関して」
3. 学会等名 日本宗教学会第77回学術大会、大谷大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 横田理博
2. 発表標題 「鈴木大拙の『大乘仏教概論』 ショーペンハウアー、ウェーバー、ジェイムズとの関連に着目して」
3. 学会等名 九州大学哲学会「特別発表」、九州大学（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Michihiro YOKOTA
2. 発表標題 “ Suzuki ' s Outlines of Mahayana Buddhism and its relation with Schopenhauer ”
3. 学会等名 International Conference: The World as Will and Representation Re-read: The Whole Conception, the Central Themes and <Schopenhauer and “ the Orient ” >, Ryukoku University, Kyoto（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横田理博
2. 発表標題 「鈴木大拙の『日本的靈性』に関して」
3. 学会等名 日本宗教学会第76回学術大会、東京大学
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------